

「徵挽畢載績先生詩序啓」では、畢氏の薰陶をたたえて、

「彭澤菊花之種、流布鄉隣、瀟湘橘柚之香、分胎閩社」と

ある。「文集」巻七の「代畢刺史覆新城王啓」では、自分(畢)

の現状を相手に知らせて、「書堆北閣、先太保之遺教云何、

菊淡東籬、舊長吏之門庭若此」とある。

(5) 「詩集」巻三、「哭畢刺史」八首其七

(6) 「詩集」巻二、「荒園小構落成有叢柏當門顔曰緑屏齋」十  
一首其三

(7) 「詩集」巻三、「斗室落成從兒輩顔之面壁居」四首其一

(8) 「文集」巻八「述劉氏行実」に、「十餘年、漸自成立、為  
婚嫁所迫促、努力起屋宇、一子授一室、而一畝之院、遂無  
隙地、向之蓬蒿、悉化而茅茨矣」とある。

(9) 「聊齋志異」(東京大学中文研究室編『中国の名著』所収、  
勁草書房)

(10) 「聊齋志異の本事」(『戯曲小説叢考』所収、中華書局)

(11) 「《聊齋志異》本事旁証」(『蒲松齡研究集刊』第一輯、  
齊魯書社)

(12) 「蒲松齡与民間文学」(『蒲松齡研究集刊』第二輯、齊魯  
書社)

(13) 「聊齋民譚考」(『芸文研究』第二十七号、慶応義塾大学)

## 六 おわりに

一本の菊は、意外に多くのことを私たちに語りかけていた。

そして、一九七九年九月、山東省淄川県西鋪を訪れた殷孟倫によ  
れば、石隱園旧跡には一面に菊が咲いていたとのことである。

(1) 「己未九月偕世傾瑞芳郝浚諸君由濟南經張店赴淄川訪蒲松  
齡故居并至西鋪畢氏石隱園旧址觀蝴蝶松」と題する詩三首  
の其二に、「移來西鋪綽然堂、陳設分明并兩家、松菊一庭增  
麗色、聊齋自合賞秋花」とある。(『蒲松齡研究集刊』第  
一輯所収、齊魯書社)

(付記) 脱稿直前に入手した李厚基、韓海明『人鬼狐妖的芸術世  
界』一九八二年、天津人民出版社所収の論文「漱滌萬物、  
牢籠百態——《聊齋志異》的創作和生活的關係」も「黄英」  
と「我昔愛菊成菊癖」の詩の関連を欄外に注記している  
が、本稿のような分析には及んでいない。

『志異』の執筆時期は、確証のある最も遅いもので康熙四十六年(一七〇七年)六十八歳の作品を含むように、ほぼ彼の全生涯にわたっており、この「黄英」の執筆もいつであるか不明であるものの、恐らく最晩年に近いこの詩よりも遅れるとは考えにくい。ゆえにこの詩を作りながら、松齡の内部にはかつての畢際有との菊を巡るなつかしい思い出や、『志異』の「黄英」を書いた時の記憶などが去来した筈である。子才が松齡の分身的存在であることは、以上のことから見て容易に推測できよう。

第九句「作客離家三十年」は、言うまでもなく四十一歳から七十歳を過ぎるまで三十年間、畢家の館師を勤めた事情を指す。第十句「菊徑就荒菊根死」は、かの陶淵明の「歸去來の辞」に「三逕就荒、松菊猶存」とあるのを意識している。

松齡の家の菊が荒れ果てたのは、長年の館師生活で留守にすることが多かったせいばかりではない。彼は四十九歳の時、「緑屏齋」と名づけた息子のための建物を自宅の内に立て、「残春 雨を冒しおか 兒菊を栽え、小院 山客の門を閉ざすが如し」と述べているが、五十八歳の時には更に「面壁居」という茅屋を敷地内に作ったため、「庭に秋菊を栽える隙地なく、道界の長籬に晚菘を種う」と、菊畑のための余裕がなくなつたことを告げる。子供たちのために家を立ててやるのに精一杯で、鑑賞用の菊にまでも手が回らなかつたのであろう。

こうした家庭的経済的な問題と同時に、有力なパトロンであり良

き理解者でもあつた畢際有の死(松齡五十四歳の時)が、彼の菊に対する熱意を失わせる一つの契機であつたろうことは、充分に想像できる。何故なら、好事家というものは、いつでも同好の士を求めたがるものであるから。

「黄英」を、当時の民間説話に材を取り想像力を以て加筆した作品、と見なす前野直彬氏(一九六一年)の説は、その元になる説話を提示していない以上、空振りに終っている。『志異』の作品と先行する説話や小説との関係を指摘した葉徳均(一九五七年)聶石樵(一九八〇年)汪玲玲(一九八一年)や藤田祐賢氏(一九六七年)らのいずれのリストにも「黄英」の名は見当らない。

この作品が、松齡と際有の菊を巡る交友の中から生まれたものか、畢氏没後に、いわば鎮魂歌として作られたものか、にわかには定めがたいが、少なくとも菊に取り憑かれ魅せられた、彼のある時期の生活体験がもたらした作品であることは間違いないと、私は思う。

- (1) 「蒲松齡の一生」(『蒲松齡研究集刊』第二輯、齊魯書社)
- (2) 康熙四十六年の詩の題に、「避暑石隱園蓬蒿没徑借亭為廩不可齋矣感而書此」(『詩集』卷四)とある。
- (3) 「詩集」卷三の詩の題に、「辛未九月至濟南遊東流水即為畢刺史物色菊種」とある。

(4) 畢際有を陶淵明に比擬する章句は多い。「文集」卷五の

散髮共坐花香裏 髮を散じ共に坐す 花香の裏

傳枝羯鼓頻相催 枝に傳う羯鼓 頻に相催し

醉倒荒園迷墜履 荒園に醉倒し 迷りて履を墜す

作客離家三十年 客と作り家を離るること三十年

菊徑就荒菊根死 菊徑荒れ就て 菊根死す

今如異域逢故人 今異域に故人に逢う如く

眼割胸放心歡喜 眼割がり胸放たれ 心は歡喜す

白成明錦聚似雲 白は明錦と成り 聚りて雲に似

紫作朝霞散如綺 紫は朝霞と作り 散じて綺の如し

主人高雅能延賓 主人は高雅にして能く賓を延べ

具酒羅漿多且旨 酒を具え漿を羅べ 多く且つ旨し

飲少輒醉獨先眠 飲むこと少しくして輒ち酔い 獨り先に眠る

猶覺寒香到枕邊 猶なほ寒香の枕邊に到るを覺ゆ

(一) 唐の玄宗が羯鼓を鳴らした時、園中の百

花が一斉に開いた故事

冒頭の第一句「我昔愛菊成菊癖」で、松齡は、昔年の菊への過剰

な情熱をはつきり告白する。彼の菊に対する異常なほどの打ち込み

ようは、第三、四句が活写している。

この場合留意せねばならないのは、第一句の「成菊癖」の「癖」

の字。それは、この字が『志異』に於いて、単なる習性や趣味といっ

た意味を衝き破る過激なニュアンスを帯びているからである。

「葛巾」の常生は大の牡丹愛好家(癖好牡丹)、「鵠異」(卷六)

の張生は異常な鳩マニア(癖好之)、「局詐」(卷八)の李生と道

士は琴に関する偏執狂(道士之癖、更甚于李生也)と、いずれも精

神の均衡をいささか失った連中の性格に、この字は冠せられる。そ

して極めつけは「棋鬼」の囲碁氣狂いであろう。囲碁で家産を潰し

た男の「癖」は——癖嗜弁、産蕩盡——冥界に墮ちても治ることな

く、遂に無限地獄に送られる。異史氏が述べるように、まさに人間

を狂わせ、その身を滅ぼすデーモンの存在を「癖」の字は語る。こ

の意味で「癖」とは、『志異』で特徴的に出現する「痴」の語と一

脈通じる。

そして「黄英」の子才も、「癖」の字こそ使わないものの、「世

の菊を好むも、(子)才に至るや尤も甚し」と冒頭でその性格を説

明されるように、「菊癖」に取り憑かれた人間の一員であった。松

齡、子才に更に付け加えれば、かの畢際有も、完璧なものを求める

態度に於いて「癖」と呼ばれたことは、刮目に価する——「物は必

ず工を求め 眞に癖に似、書を如し買はんと欲すれば金を論ぜず」。

第二句「佳種不憚求千里」は、前記の二十一年前に際有のため濟南

へ菊を捜しに行った思い出などが、彼の脳裏に浮んでいたかも知れ

ない。しかしそれ以上にここで私が指摘したいのは、この句と酷似

する表現が「黄英」の冒頭に、「聞有佳種、必購之、千里不憚」と

で悠悠自適の生活を楽しんだ際有の生涯を重ねる。彼が知事を罷めたのは康熙二年(一六六三年)、松齡二十四歳の時。

第三、四句「老後生涯棋局裏、閒來情緒菊花中」は、際有の晩年の楽しみが、囲碁と菊にあったことを指す。囲碁については松齡も関心が高く、『志異』の中に囲碁気狂いの話「碁鬼」(巻四)をはじめとして頻出し、「黄英」の荒筋(Ⅳ)で陶生と子才が囲碁にふけることも思い合わされる。

第五句「離奢始恨相知晩」は、二人が心からうちとけた友人になったことの遅きを無念がる。注意を促したいのは、「黄英」の荒筋(Ⅳ)、陶生と曾某が知り合う場面にも「二人縦飲甚歡、相得恨晩」と同じ表現があること。更に『志異』巻二「酒友」にも車某と狐が、「于是恨相得晩」。

畢家の人々は、悠然たる在野の富裕知識層の雰囲気を身につけていたようである。『志異』巻七「顛道人」が語る、際有の父(自巖)の妹婿、殷生員の仙人のような洒脱な人柄や、「狐夢」に記される際有の甥、畢怡庵の世俗に超然とした態度、更に「鷓鴣」(巻三)「五段大夫」(巻三)が語る、際有自身の怪異譚の記録収集などを総合すれば、石隠園で松齡が『志異』を書き続けた営みには、一つの背景があったことを私たちに想像させる。

こうした松齡と際有の関係を考慮する時、通州知事をあつさりとして退き、以後再び出仕することなく石隠園という宏大な庭を持つ屋敷

の内で、囲碁と菊を愛し閑適の生活を送った、陶淵明にも似た風流人<sup>(4)</sup>、畢際有の姿は、菊の物語「黄英」の陶生の像と低い音程で響き合っているように思われる。

補足すれば、私は陶生が100%際有をモデルにしていると断定するつもりはない。言うまでもなく、作中の人物と実在の人物との間には、越えがたい一線が存在しているのであるから。ただ少なくとも、陶生を「施潤章<sup>マツ</sup>の才と、少年期の蒲松齡との錯綜した投影像・虚像」(大野氏前掲論文)とする意味不明な比定よりは、遙かに合理性が高いと考えるまでである。

畢際有のため菊を捜しに出かけたことから分る通り、松齡もまた人生のある時期、菊作り菊集めに耽溺した。

康熙五十一年(一七二二年)、最晩年に近い松齡七十三歳の時、久しぶりの菊の鑑賞を喜ぶ詩。「詩集」巻五。

#### 十月孫聖佐齋中賞菊

我昔愛菊成菊癖 我昔菊を愛し菊癖を成し

佳種不憚求千里 佳種を千里に求めて憚らず

朝夕眩目睛勞 朝夕眩目 目睛勞れ

月上桔槔聲未已 月桔槔に上るも聲未だ止まず

重陽設酒綠畦傍 重陽に酒を設く 綠畦の傍ら

なつたのは、路氏の『年譜』以来三十三歳というのが定説であつたが、最近の高明閣の考証（一九八一年）<sup>(1)</sup>に従つて四十一歳とするのが正しいと思われる。そして彼は以後三十年、畢家の人たちと交流を持った。

この畢氏は、松齡も住んでいた綽然堂や傲樊堂などの別荘や、石隠園という広大な庭園を所有していた。石隠園には、万笏山（築山）、蔓松橋、遠心亭、霞綺軒などが配置され、牡丹の小径がその間を縫い、松、竹、桧、梓、桐などの樹木や、葵、菊、蘿、百合、藤、海棠、蒔、芟、荷、苻、薜荔など、多種多様の草花が植えられていた。緑陰の多かつたこの庭は、夏場に快適な温度をもたらしたようであるが、ただ松齡の晩年にはかなり老朽化し、寝食するに不適當であつたことを伝えている。<sup>(2)</sup>

『志異』の製作時点を確定することは困難であるが、少なくともその何割かが石隠園での館師生活の余暇に記されたことは、「絳妃」（巻六）が綽然堂にいた時の自分の体験談の形をとることや、「狐夢」（巻五）の後書きからも分る。この石隠園は、『志異』完成のための空間を作者に提供しただけでなく、時に『志異』の作品中の舞台となつていたのである。

この庭園の主人、畢際有は、とりわけ菊に愛着を示した人であつた。

康熙三十年（一六九一年）、松齡は彼のため菊の苗を捜しに、淄川から省都済南に出かけている。<sup>(3)</sup>しかし、松齡が「菊の種を物色」

した翌々年（一六九三年）、際有は亡くなる。次に掲げるのは、「詩集」巻三に収めるその哀悼の詩。

哭畢刺史 八首其五

琴尊冷落小堂空 琴尊冷落 小堂空<sup>(1)</sup>し

苦憶歸田靖節翁 苦<sup>(2)</sup>だ憶う 歸田の靖節翁を

老後生涯棋局裏 老後の生涯 棋局の裏<sup>(3)</sup>

閒來情緒菊花中 閒來の情緒 菊花の中

離奢始恨相知晚 離ること奢<sup>(4)</sup>くして始めて相知るの晩きを恨

む

聚久寧疑好會終 聚<sup>(5)</sup>うこと久しかれば寧<sup>(6)</sup>くんぞ好會の終るを疑

わんや

玉骨珊珊人何在 玉骨珊珊 人は何<sup>(7)</sup>に在るや

三山巔畔海雲東 三山<sup>(8)</sup>の巔畔 海雲の東

(i) 琴と酒樽

(ii) 東海の三つの仙山（蓬萊、方丈、瀛洲）

第二句「苦憶歸田靖節翁」の「歸田」は、官を辞して帰郷すること。

「靖節」は陶淵明の諡。松齡の筆は、五斗米のため節を曲げるを潔しとせず「歸田」した淵明の生き方に、知通州を罷め故郷淄川

ず、現実世界で無力なことを改めて思い知るのである。換言すれば、異類が人間界に定着できず消え去ることにより、それまでの異常に恵まれた状態の虚構性が露呈し、物語は幕を降ろさざるを得なくなる。

この点(B)の型は明らかに変格である。「嬌娜」(巻一)「青鳳」(巻一)「鳳仙」(巻九)「織成」(巻十一)等の作品では、異類であることが大した障害にならず、人間と異類の区別を越えて両者が幸福を分かち合うハッピーエンドで結ばれる。しかし作品の最後に至ってもなお異類が人間と協調し続けるとあらば、物語の冒頭から最後の一行まで、ストーリーの総ては虚構の枠に収納され、物語全体が一枚の寓意画と化す。つまり物語の中での現実性が保証されていないことになる。

一抹の疑念から女の正体をつきとめ、結局自らの手で幸福な生活を破滅させることになった「葛巾」の常生と同様に、あれほど菊を愛しながら、自分の不注意のため菊の陶生を殺してしまう子才の行為の中に、私たちは、如何ともしがたい人間というものの本質を垣間見ることができよう。

- (1) 「古代風俗、以農曆二月十二日(一説十五日)為百花生日、叫做花朝」(張友鶴選注『聊齋志異選』一九五八年、中華書局)

- (2) 『言語と行為』一九七八年、大修館書店

- (3) 「天使との格闘」(『物語の構造分析』所収、一九七九年、みすず書房)

## 五 蒲松齡と菊

蒲松齡の詩は、いま彼の全集(路大荒編『蒲松齡集』一九六二年、中華書局)によれば九百余首数えるが、そのうち「菊」及びその別名「黄花」を詩語に持つものは、四十首前後である。

これらの作品は、当然ながら重陽の節句に製作されたものが多い。この日に「菊」を題材として歌うことは、当時の風俗習慣から言うて知識人の一般的な作詩態度であり、そこに何か格別な意味を見出すことは難しい。せいぜい菊と重陽の修辭作法上の結びつきの固さを再確認させられるに終ろう。

そのことを除けば、菊に言及する詩が示す一つの特徴は、畢際有——松齡が館師(住み込みの家庭教師)として雇われた家の主人——その人との関連である。

畢際有(字は載績)は、明代に戸部尚書にまでのぼった畢自嚴の次男で、松齡の故郷山東省淄川県の名士であった。彼は順治二年(一六四五年)拔貢生となり、通州の知事を勤めたのち帰郷。松齡は招かれてこの畢家の子弟たちに勉強をつけた。彼が畢家の館師に

いけないだろう。

荒筋(Ⅳ)、子才が菊を引き抜くと枯れてしまったので、驚いて黄英に告げる。すると彼女はこう叫ぶ。「弟を殺してしまった(殺吾弟矣)」。事実子才は、幾つかの点で直接間接に弟の死に介在しているのである。

荒筋(Ⅳ)、(i)彼は嫌がる弟を南京から連れ帰り、(ii)門を閉ざし交際を断っていた弟を、自分の友人曾某と飲み比べさせ、(iii)花祭りの日、酒を飲み干しても酔わない二人(弟と曾)に、ひそかに酒をつぎ足し——馬潛以一瓶續入之——(iv)菊になった弟を勝手に引き抜き枯死させた。

(i)から(iii)までは、子才に何か底意があったのか、純粹に好意から出たのか、にわかに判断がつきかねるが、(iv)は明らかに彼の不注意、軽率としか言いようがない。異類婚姻譚、交友譚では、こうした人間の側のもたらす原因によって、人間と異類の交渉が破綻をきたす例が多い。

「双灯」(巻四)のように女(狐)が理由も言わず突然別れを告げる場合は少なく、男の猜疑心が女を追いつめ(「葛巾」「甄后」)、男の一寸した軽はずみが女を死なせ(「愛奴」巻九)、男の軽薄さや無教養に女がとうとう愛想を尽かす(「辛十四娘」巻四「嘉平公子」巻十一)……。

しかし考えてみれば、不注意、約束違反、欲望、猜疑心といったこれらの原因は、抑も人間である以上免れがたい、人間の本質に基

づくものではなからうか。もしそうであるなら、物語で語られる人間と異類の協調は、その土台に根源的なものを含んでいることになる。

『志異』の異類婚姻譚、交友譚の結末を大別すれば、次の三つのパターンに分かれる。

(A)異類が人間と別れ人間界から消える。

(B)異類が人間と一緒に人間界で幸せに暮らす。

(C)異類と人間が一緒に人間界から消える。

(C)は、(A)(B)の折衷型。いまこれら三つの型について詳細に論及する余裕を持たないが、(A)と(B)についてのみここで簡単に触れておく。元より『志異』の中で、異類の訪問を受ける人間の多くは、身分制度上の落ちこぼれ(科挙落第生)、「痴」と呼ばれる人格的な逸脱者(変人、愚鈍)、身体障害者など、社会的人間的に様々なマイナス要素を背負った人々であり、彼らは異類の力により金銭、愛情、身分などを与えられ、至福の状態に押し上げられる。「蕙芳」(巻六)「周克昌」(巻八)等の異史氏が述べる、愚鈍な人間ほど幸福になる権利を持つ、という逆説がそれである。

だが、(A)型の場合のように、人間のもたらす原因によって異類が飄然と消え去る時、残された人間は始めてそれまでの至福の状態が全く仮りのものであったことを知る。逆説があくまでも逆説にすぎ

強い異類的性格を賦与された弟は、菊の仕入れでたびたび南方に出かけ、遂にそのまま失踪し、子才に発見されても、南京でこのまま結婚し落ちつきたいと述べ、帰宅の催促に抵抗した。こうしてみれば右の弟の言葉は、早くも、結末の二人の対比的な運命——人間になりきった黄英と菊に戻った弟の陶——を導く布石と言える。

私たちが、作品にこの二項対立的な磁場の存在を想定する時、荒筋(Ⅳ)、南京で発見された弟が、無理やり北京に連れ戻された時点で、既に彼の悲劇的な運命は動かしがたい様相を帯びる。帰宅後の彼が、他人との交際を避け子才と棋酒にふけるのみで、結婚の勧めにも応じず、本性を露呈したのは、次第に自暴自棄に傾いていったのも、「南」の磁場へと退行しがちな彼の菊の本能を示唆しよう。

そして物語の大詰め、陶生の化身としての死と、菊としての再生について分析を下そう。荒筋(Ⅳ)、子才の友人の曾某と陶は、「花朝」(花祭り)の日、いつものように飲み比べ、陶は酔って菊に戻る。子才が黄英の真似をして引き抜くと枯死。黄英が駆けつけたが間に合わなかった。

問題はこの「花朝」という日。この日は旧暦二月十二日(一説に十五日)で、百花誕生の日とされている<sup>(1)</sup>。即ち、作品の深層では、枯死の時点で既に彼の再生が周到に約束されているのである。

更に再生した弟に対して、姉が「酔陶」と名づけたのも、この姉弟の微妙な関係を語って意味深長である。

彼女は、枯死した弟を鉢に移植し、寢室に運び入れ(攜入閨中)、熱心に世話をした。その甲斐あって、九月には花をつけ、においを嗅ぐと酒香がしたので、「酔陶」と名づけた(嗅之有酒香、名之酔陶)。

ここで表層上注意したいのは、「名づける」という姉の行為である。というのもこの言葉は、言語学的説明を与えれば、オースティンの称した「行為遂行的」な動詞に属し、特殊な言語的機能を担っているからだ<sup>(2)</sup>。つまりこの動詞は、その発話自体が、発話者の一つの態度を表出する作用を働かせ、この場合の文脈に適用すれば、黄英は名づけることにより、彼女の弟への祝福、再生を遂げたことへの祝福、を表出していることを示す。

またバルトの次の発言も、彼女の弟に対する庇護者的な立場を理解する参考になろう。

《命名》は明らかに《祝福》と結びつく。祝福すること(ひびき)まずいて懇願する者の敬意を受け入れること<sup>(3)</sup>、命名することは、宗主の行為である。

\*

\*

陶生の酔死と「酔陶」としての再生により、物語は大団円を迎えた。しかし、その終局の陰の演出者に子才がいたことを見逃しては



荒筋(I)、子才が、北方にない(北方所無)菊の珍種が南京にあると聞き早速出かけ、どうやら二株を手に入れた(得兩芽)。

この二株の貴重な菊の獲得は、その帰途、菊の姉弟二人を連れ帰ることを考え合わせれば、単なる字義以上のものを私たちに暗示してはいないだろうか。

次いで、子才が「順天」北京の人、姉弟が「金陵」南京の出身——荒筋(IV)「陶曰、金陵、吾故土」——という対立的出自であることも、作品に微妙な響きを与えている。

何故ならば、子才と姉弟の三人の行動は、北京||人間、南京||異類という巨大な双極の磁場の中で、それぞれの形象に準じて決定されているからだ。このことを理解するために、姉弟の異類性について改めて述べる必要がある。

顧みれば、同じ菊の精とは言え、この姉弟の異類性は必ずしも等しくない。黄英は前に述べたように異類の特性に乏しく、むしろ人間の女性に近い姿に造型されている。彼女は異類でありながら、作品の最後まで遂に自分の正体を告白することなく、弟のように元の菊の姿に戻ることもなく終っている。

対するに弟の陶生は、『志異』の多くの異類同様、いくつかの不思議な術を行使し、人間離れた能力を際立たせる。

荒筋(I)、子才と出会った彼は、菊談議に入っただけのように述べる。「品種はどんなものでもよいのです。問題はどうかやって生育させる

かです(種無不佳、培植在人)」。

遠路はるばる「佳種」を求めてやっと入手したばかりの子才に向って、こう述べる陶生の言葉が、遠回しの批判を含んでいるのは、荒筋(II)で展開される二人の対立の伏線として注目を要する。

この言葉通り、荒筋(II)で陶は、子才の棄てた「殘枝劣種」を拾い集め、すべて未だ目にしたことのない絶品に仕立てあげる。彼の畑では、植えたばかりの苗が一晩で一尺に達する不思議が起きていたのである。

あるいは荒筋(II)、子才が南邸を訪ね陶と飲みながら、お姉さんは何故結婚しないのか尋ねると、陶は、まだその時期が来ていないから、と答える。奇妙に思った子才が、ではそれは何時かと問うと、四十三ヶ月後という返事。この陶の謎めいた受け答えは、後に子才が妻をなくし黄英と再婚する運命と符合し、予言であったことが分かる。

そして最後に正体を暴露したのも陶である。荒筋(IV)、酔って倒れた彼は、<sup>こがし</sup>拳ほどの大きな花を十余もつけた、人の身長ほどの巨大な菊と化す。弟はこのように、姉と違って濃厚に異類として標識づけられ、作品の随所にその痕迹を残している。

元に戻るなら、人間vs異類が、北京vs南京という作品世界の磁場と照応していることは、例えば荒筋(1)の出会いで交わされる会話で、弟の「姉が金陵に厭きて北方に引越す所です」の言葉が婉曲に語る。異類性の弱い姉は、早くから北方||人間への志向を持ち、逆に

この名高い文章で、彼は菊を「花の隠逸なる者」と呼び、淵明以後それを愛する人の少ないこと、牡丹を「花の富貴なる者」と呼び、世間の多くの人間が争い求めることを指摘した。彼の論旨は、市井にあっても俗臭に染まらない蓮のような生き方を最高と見る所に在るのだが、隠遁のシンボルとして菊を、世俗のシンボルとして牡丹を挙げている点は興味深い。

清楚で地味な菊の花は、古代から一貫して反俗と隠逸と孤高の味方であり続け、その姿は、出仕栄達を断念した世界で自足せねばならぬ不遇の士大夫の生き方と共鳴した。

牡丹の化身、葛巾や香玉が、異類の特質を思いきり發揮し、自由に男に甘えたり尽くしたりするのに比べ、菊の黄英が、完全に異類に徹しきれず、その中に士大夫の思考が投影されているのは、牡丹と菊を支える各々のイメージの土壌の差が、微妙にそこに作用しているからに他なるまい。

(1) 『蒲松齡伝』 秋山書店

(2) 「聊齋志異、人間の女と異類の女」(伊藤漱平編『中国の古典文学』所収、東京大学出版会)

(3) 「飲酒詩二十首」其七には「秋菊有佳色、露沾其英、汎此忘憂物、遠我遺世情」とある。あるいは『芸文類聚』卷八十一の『続晋陽秋』は次のエピソードを記す。「陶潛無酒、坐宅邊菊叢中、採摘盈把、望見王弘遣送酒、即便就酌」

(4) 「南陽酈縣、有甘谷、谷水甘美、云其山上大有菊、水從山上流下、得其滋液、谷中有三十餘家、不復穿井、悉飲此水、上壽百二三十、中百餘、下七八十者、名之大天、菊華輕身益氣故也、……」(『芸文類聚』卷八十一所収の佚文)

(5) 内篇卷十一仙葉、内容は右の『風俗通義』佚文とほぼ同じ。

(6) 「朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英」(離騷) 「春蘭兮秋菊、長無絶兮終古」(九歌礼魂)

(7) 『九日与鐘繇書』(『全三国文』卷七所収)

(8) 范成大『菊譜』(『説郛』卷七十所収)

(9) 『洛陽牡丹記』(『歐陽文忠公集』卷七十二所収)

(10) 「京城貴遊、尚牡丹三十餘年矣、每春暮車馬若狂、以不軌玩為恥、執金吾鋪官園外寺觀種以求利、一本有直數萬者、……」(『唐国史補』卷中)

(11) 『本草綱目』卷十四

#### 四 作品の構造

陶生がこの作品の最も重要な人物であることは先に指摘した。この章では、彼の作中の行動を洗い直し、物語が秘める奥行きを深さを測ろうと思う。

作品はまず冒頭から、はなはだ象徴的な幕明けで始まる。

の男色女装などの極彩色のエロティシズムや、「金世成」(巻二)の糞尿嗜好、「陸判」(巻二)の内臓交換、「席方平」(巻十)の拷問責めなどのどぎついグロテスクを前にしては、むしろ色褪せるほどである。「志異」には、程度に差はあれ、こうした低俗的な好奇心をあおる露骨な描写や題材がしばしば登場する。

しかし、「黄英」にはその種の場面も描写も皆無であった。葛巾や香玉が、異類的な魅力を備え、男の求愛の対象として存在しているのに比べ、黄英は、男と議論し、たしなめる女性として存在している。こうした彼女の形象には、当然ながら菊の通時的な生い立ちが深く関与している。

周知の如く、菊は古来から高潔の象徴であった。陶淵明の有名な句、「菊を采る東籬の下、悠然と南山を見る」(「飲酒二十首」其五)により、菊は彼の清貧固窮の人生や哲学と分ち難く結びついて来た。<sup>(3)</sup>

古代に溯れば、菊は不老不死の仙薬と見なされ、「風俗通義」や『抱朴子』のエピソードは、菊の持つ靈的な効能を宣伝した。また『荆楚歲時記』は、九月九日重陽の節句に長寿を願って菊花酒を飲む風習を記す。

この植物が元々南方系であることは、早く『楚辞』に出て『詩経』に見当らぬことからも推察がつく。そして『楚辞』で蘭や木蘭といった芳香を発する草木と対になり、菊は孤高や清廉の衣裳をまとつ

て来た。曹丕の言うように<sup>(7)</sup>、多くの植物が霜に枯れ散る晩秋にあつて「紛然として独り栄える」姿に、古代の人々は、神秘的な生命力と孤独な運命を発見したのである。

菊は、不老長寿、重陽の節句、菊花酒、陶淵明などの語彙と固く連繋し、更にその周縁の領域には、孤高、清貧などの概念用語も曳航して来た。松齡が、菊の姉弟に陶姓を名のらせ、弟の死と再生に酒を絡ませ、清貧論を作中人物に戦わせたのも、以上のような菊を<sup>(8)</sup>圍繞する文学上の暗黙の了解が、続み手の側にあることを見越した上でのことに他ならない。

そして、「黄英」が、他の花妖の異類婚姻譚に見られるドタバタ場面やあからさまな恋愛描写を許さなかったのも、「山林の好事なる者、或るいは菊を以て君子に比す」と称された、この菊の品位と関係する。

一方、牡丹について言うならば、歐陽脩が述べたように<sup>(9)</sup>、その流行は唐代に入ってからであった。だがそれが熱狂的な流行であったことは『唐国史補』<sup>(10)</sup>が伝える。北宋の周敝『洛陽花木記』が、牡丹百九種、菊二十四種を列挙していることも、前者の盛況ぶりを裏書きしよう。明の李時珍も、花王と呼ばれる牡丹を第一、芍薬を第二とした<sup>(11)</sup>。この傾向は、清代を経て現代に至るも、恐らく変わっていないと思われる。牡丹の花は、濃厚で豊満なその量感や、あでやかな色彩ゆえに、中国人の趣味感覚に合致していたのであろう。

そして、ここで想い起こされるのが、北宋の周敦頤の「愛蓮の説」。

「黄花」と、はな、はなびら、を指す「英」の字との合成であることは言うまでもない。ちなみに、馬子才の子才は、恐らく「才子」をひっくりかえしたものだ。

『志異』の異類の化身に対する命名法は、例えば「三仙」（巻十一）の三人の生員の姓、介、常、麻が、それぞれ蟹、長、蟆に通じること、「素秋」（巻十）の兪姓が蠹魚の魚と同音、「余徳」（巻四）の余姓も錦魚の魚と同音、などから分るように、時として異類の素姓を強く意識している。

だが黄英の異類としての個性は、葛巾や香玉に比べると影が薄い。彼女は、葛巾のような積極的行動や超能力行使もなく、香玉ほど男に対して媚態や恭順を見せるわけではない。彼女は、荒筋(I)(II)では弟の陰に寄り添う如く、つつましく貞淑な女性として振る舞い、荒筋(III)の子才との結婚後は、一変して夫と清貧論を堂々と戦わすほどの、主張する女になっている。

こうした前半から後半へかけての変貌は、私たちに彼女の存在を身近かなものにさせると同時に、とまどいも覚えさせずにおかない。何故なら、彼女の堂々たる主張それ自体が、異類であることと相容れないからである。『志異』の異類は一般に議論を好まない。彼女たちは、この世の中で抑圧され不遇に甘んじている男たちに、援助の手を差し延べ、黙って愛情を注いでくれる。子才と対等に清貧論を議論する黄英の姿勢そのものが、早くも彼女から異類らしさをそぎ落とす結果になる。

更にまた彼女の主張の内容も、考えてみれば、異類の身分にそぐわない。子才があくまで窮屈な清貧のポーズに固執するのに対し、彼女はその不自然な生き方に反論した。だが、彼女のアンチテーゼも、（出仕せず）酒や囲碁を楽しみ、菊売りも止め悠々と暮らす三人の姿（荒筋(IV)）を見れば、決して現実に対する強烈な批判精神から発したのではなく、むしろ現実を肯定した上で自己充足を計ろうとする知識人の保守的な処世観を背負っているように思われる。障害や危機を次々と乗り越え、異類婚姻を完成させてゆく葛巾と常生や香玉と黄生のカップルに比べて、黄英と子才が、殆んど何の恋愛交渉もなく、いとも簡単に結婚に入っているのは、二人が才子佳人然として議論を交わすばかりで、人間と異類としての各々の伸びやかな動きを忘れてしまっているからであろう。

例えば「葛巾」には、濃厚なエロティシズムを感じさせる次のような描写が挿入されている。

そこで体をつかみ懐に引き寄せ、スカートの結び目を解いた。玉の肌が忽ち現れ、暖かい香りがあたりに流れた。乃攬體入懐、代解裙結、玉肌乍露、熱香四流。

こうした煽情的描写は、『志異』全体のレベルを鳥瞰する時、決して例外ではなく、「伏狐」（巻三）「薬僧」（巻九）の巨根譚、「道士」（巻三）の乱交、「黄九郎」（巻三）「人妖」（巻十二）

はあり得ず、むしろ人間の女を基本に、作者の願望の赴くまま、様々なデフォルメされていると言った方が正しい。

彼女たちの中では、上品でしとやかで従順な神女型の「聶小倩」

(巻二)「連瑣」(巻三)「甄后」(巻七)や、超能力を駆使し八面六臂の働きをする全能的な「紅玉」(巻二)などが、『志異』の人間の女には乏しい所の優しさや思いやり、用意周到などを備えていて、私たちの記憶に残る。

けれども、既に戸倉英美氏(一九八一年)<sup>2</sup>がすぐれた指摘をしている通り、異類の中では何といつても、子供のように笑ってばかりいる狐の娘「嬰寧」(巻二)、おつちよこちよいの狐と諧謔上手の天女「嫦娥」(巻八)、堅物の男に様々な遊びを教える天上の織女「書痴」(巻十一)、ふざけて悪戯するのが大好きな天女「小翠」(巻七)、わがままで男を独占したがる狐仙「張鴻漸」(巻九)などこそ、烈女節婦の人間の女と正反対に位置し、最も鮮やかな個性を発揮している。

彼女たちは、異類の特性を活かしながら、伸びやかに囚われなく振る舞っており、遊びや悪戯やドタバタ騒ぎが好きで、気ままな所をその共通した要素として持つ。それは、社会や家庭の道徳的日常的な束縛が最も稀薄な世界——例えば遊里——に住む女が見せる態度に近い。そして、男との間に生まれた子供に冷淡で、やっかひも扱ひするもの(「白秋練」巻十一、「房文淑」巻十二)異類の性格の一面である。

右のような『志異』の異類全般の像を踏まえながら、花卉の異類である「黄英」と「葛巾」(巻十)「香玉」(巻十一)を比較してみよう。

「葛巾」のストーリーは、牡丹好きの男が曹州の庭園で女性と知り合い、悪戦苦闘の末に彼女と結ばれ、洛陽へ駆け落ちし、のち彼女の称した家柄に疑問をいだいた男が、ひそかに曹州へ調べにゆくと花妖であったことが判明、女は牡丹の花を残して男の前から消え去る、というもの。

この葛巾は、男に金を獲得させたり、駆け落ちのお膳立てを進めたり、更に後段の強盗襲来の場面では、巧みな弁舌と毅然たる態度で賊を退散させるなど、積極的な行動力と聡明さを兼ね備えた全能型異類に近い。しかし、意気消沈している男に鳩毒と称して回復剤を飲ませる悪戯を仕掛ける所など、異類の天真爛漫さも合わせ持っている。

また「香玉」は、労山の道教の寺の庭で、男が二人の美女、香玉と絳雪と知り合い、前者を妻、後者を女友達として遇し、離別や再会や蘇生を繰り返す中で次第に愛情を深め、最後に男も牡丹に化すという物語。香玉は、別れに際して男の腕の中で啜り泣き、花鬼と化したのちは男の救済をじっと待つ、情のこまやかな従順な女性に仕立てられている。

黄英も、元をただせば菊の精であった。彼女の名前が、菊の別名

彼女らに対する作者の見方が、かなり辛辣なものであること、次の二例が如実に示す。

「雲蘿公主」(巻九)の評語(異史氏曰く)では、「じゃじゃ馬や嫉妬狂いの女房は、巡り会ったら最後、骨にできた腫瘍同然、死ぬまで治らない。ひどいものだ」と、絶望的な口調で嘆き、「夜叉国」(巻三)の評語でも次のようにあてこする。「夜叉夫人とはめつたに聞かないが、しかしよく考えてもみれば珍しくない。どこの家でも寝室に一匹の夜叉がいるのだから」。

松齡がこのように嘆くのも無理からぬほど、『志異』の女房たちは荒れ狂う。先の「雲蘿公主」や「閻王」(巻五)「江城」(巻六)「馬介甫」(巻六)「邵女」(巻七)などが語る、亭主や妾や姑に対する虐待は全く凄まじい。ビンタをくらわせ、鞭で打ち据え、土下座させるなどは序の口で、針で腹を刺し、顔に烙印を押し、踏みつけた餅を食べさせるなどに至っては、いささかサディズムに傾斜している。ただいずれも、余りに極端な行動ゆえに、かえって現実の深刻な家庭内の対立を写したものであり得なくなっている。

こうした「懼内」(恐妻)物語は、悍婦に痛烈なお仕置を加える「邵臨溜」(巻九)が示すように、総じて滑稽感を誘うよう戯画化されており、溯上すれば、明代笑話や更に六朝小説(『世説新語』や『妬記』の悪妻妬婦のエピソード)まで行きつくほどの、文学上の小説分野での常套的題材であった。あるいはここに、殆んど一生科挙に失敗し続けた松齡を見守り、四男一女を育て家庭をきりもり

した賢妻劉氏に対するコンプレックスの爆発を見る説(前野直彬氏、一九七六年<sup>(1)</sup>)もある。

要するにその源泉が、松齡の生活上の実感か、単なる被害妄想か、小説の常套か、いずれに在ったかは見極め難いものの、『志異』の女房たちが、多くは可愛気のない、しかし実務能力にたけた女性として描かれていることは事実である。

男と情を交わしたのちも全くうちとけず、家事を敏速に処理しながら、最後に父の仇を討ち男のもとを去る「侠女」(巻二)、父を殺された娘が歌手に変装し仇を討つ「商三官」(巻三)、鈍い夫に代わって男装し科挙に合格する「顔氏」(巻六)や女丈夫の「農婦」(巻九)など、これら一群の作品の烈女たちは、唐代伝奇の「紅綫」「聶隱娘」や遠く木蘭従軍物語の血筋をひいて痛快な活躍をしながら、その姿には本来女性の持つはずの柔軟さが不自然に切り捨てられた恨みが残る。

家事上手、教育上手の「細柳」(巻七)、気の強い万事やり手の「仇大娘」(巻十)、恨みに報いるに恩を以てした「胡四娘」(巻七)「珊瑚」(巻十)、正妻の虐待に耐え抜き遂に信頼を得た妾「邵女」(巻七)なども、節婦賢妻として余りに類型化され過ぎ、面白さを欠く。

では異類の女たちはどうか。

彼女たちも、その人物形象に於いて、人間の女と絶縁ということ

まとめるならば、(I)の子才と姉弟の出会い以降、(II)(III)のストーリーは、子才と姉弟が、対立項として組み合わせを変換しながら進んでゆくことになる。

(I) 子才 vs 姉弟 (出会い)

(II) 子才 vs 陶生 (対立)

(III) 子才 vs 黄英 (対立)

荒筋(IV)は、南京で発見された弟の運命が中心となり、彼の残した一人娘と黄英のその後が、後日談として言い及ぼされている点から見て、姉弟の対比的運命——人間になりきった姉と菊に戻った弟——が主題を占める。

(IV) 陶生 vs 黄英 (対比)

以上のように、この物語の技葉を振り落せば、これが単に花に血迷った男の話でも、男と花の妖精との異類婚姻譚だけでもないことが分る。即ち作品は、子才、陶生、黄英という三人が、三者の間それぞれ対立的な様々の次元の関係、人間 vs 異類、主人 vs 居候、姉 vs 弟、富貴 vs 貧窮、を結びつつ、入れ変わり立ち変わりストーリーの歯車を回してゆく構成をとる。

この三者三様の回転の中でも、私にはとりわけ弟の陶生の存在が、

作品の中軸として機能しているように思われる。何故なら、この作品には前掲の本文終了後、『史記』の「太史公曰く」の体裁を模倣した「異史氏曰く」という松齡の評語がついているが、それは、陶生に対する愛惜の辞に終始しているからである。

青山白雲のようなさっぱりした人(陶生)は、とうとう醉死し、世の人はみな残念に思った。だが彼自身は案外満足していたかも知れない。この菊を庭に植えれば、良友にまみえたり、美人に対面したりするようなものであるから、捜さずにはいられない。

青山白雲人、遂以醉死、世盡惜之、而未必不自以為快也、植此種子庭中、如見良友、如對麗人、不可不物色之也。

(1) 路大荒編『蒲松齡集』文集卷二「清韻居記」

### 三 黄英と菊

三人の主要な登場人物のうち、この作品の題名を担っている姉の黄英についてまず論を進めよう。だがその前に、『志異』で描かれている人間の女性たちについて、少し述べておいた方がよいかも知れない。

として菊を使っているに過ぎない。

## 二 作品の主題

既に見たように、「黄英」に対する評価や読解は、大きな振幅を示した。そのことは取りも直さず、この作品の主題の捉え難さを物語る。私たちに必要な作業は、まず作品の荒筋をもう一度整理し、個々の段落を絞り込むことにより、作中人物の行為や態度を把握することである。

荒筋(Ⅰ)(Ⅱ)では、子才と姉弟の出会い、やがて起こる菊を売るか否かの対立が、ストーリーの眼目となる。この対立は、姉弟の方が商売に踏み切り、「発財」（財産を築く）してゆくことで、暗に姉弟の主張の勝利を示しながら落着する。

両者の対立は、士大夫知識人の伝統的な清貧思想（かたく）を頑なに遵守する子才と、生活を充足させるためなら菊を売ることも辞さぬ弟との間の議論で顕在化する。弟の「自分で努力して食べてゆくのは貪欲とは別で、決して悪いことではない。むしろいつまでも貧乏に甘んじていることこそ不自然だ」という主張が、徒らに清貧のポーズに囚われた子才を批判していることは明白であろう。

こうした見解は、『志異』（巻十一）「楽仲」の評語（異史氏いし曰く）の中で形にこだわる人間を批判して、「なまぐさを断ち酒を戒

めるのは、ほとけ仏の真似ごとだ。天真爛漫こそ、ほとけ真の仏である」と述べるのに相通じる。

荒筋(Ⅲ)でも同様の議論が交わされるが、その組み合わせは、弟から姉に交代する。

子才が、「いま女房のお蔭で生活しているとは、全く男の面目がない。人はみな金持ちになりたいと思うものだが、私だけは貧乏になりたい」とこぼせば、黄英は「私は何も欲張っているわけではありません。菊を愛する人間は昔から貧窮であると見られているため、しているまでです。持参のお金はどうぞお使いになって下さい。少しも惜しくありませんから」と勧めるが、両者の対立は、一時的な別居にまで発展する。

出仕し官僚として栄達を極めることは、古来から中国知識人の伝統的な人生目標であった。しかし、何らかの状況でそのようなオードックスな生き方が不可能になる時、在野で固窮と清貧を守り人生をまっとう全うするのも、また彼らの次善的な処世であった。子才の考え方が、次善にせよこうした知識人の伝統的な理念に基づいた窮屈さを示すのに対し、黄英の先の発言は一つの諷刺である。

松齡の文集にも、「俗」に対する「清」を次のように規定する文章を見出すことができる。「清」とは必ずしも俗塵と絶縁することではない。（その中にある）全くそれに囚われないのが「清」である。……陶淵明は僅かな俸給のため卑屈になるのを潔しとしなかつたが、これこそ「清」である<sup>(1)</sup>。



花を愛してやまぬ人の心は（「黄英」「葛巾」（巻四））、ただ死ぬほど花が好きで、そのほかにはなにもない、これは花痴である。男女の愛情にそれはもつともあらわれる。——目加田誠氏（一九六五年）<sup>(8)</sup>

「黄英」（巻四）は、菊の花を愛してやまぬ風流人と菊の精との交渉を通じて、真に自由で高雅な菊の精の心と、風流人とはいえ、結局は浅はかな小ざかしい人間でしかなかった男とをみごとに描き出している。これは花に迷う〈花痴〉の心を描いたと言うべきであろうか。——竹田晃氏（一九八〇年）<sup>(9)</sup>

※右の巻数の表示は、いずれも全十六巻の青柯亭本によるもの。

いずれも主題について簡潔に触れているが、なおそれは一読した印象の言葉の域を出していない。

確かに両氏の言われるように、一人の男が愚かさゆえに花に迷う生き方も描かれてはいる。だが、この物語の大詰め——荒筋(IV)——は、弟の陶生の死と菊としての再生であり、作品末尾の後日談も、弟の残した一人娘の成長と結婚、黄英の無事、が語られるのみで、そこに子才についての情報は何もない。

このことは、子才よりも、むしろ姉弟の方に一篇の重心が懸っていることを示唆するのではあるまいか。

以下で述べる如く、「黄英」は、その底に極めて普遍的な物語の構造を秘めながら、菊にまつわる歴史上のイメージを至る所に投影させ、更に作者蒲松齡の人生活動の側面をはしなくも語ってくれる、はなはだ多層的な作品なのである。<sup>(10)</sup>

(1) 「試談『聊齋志異』的思想」（『中国古典小説評論集』所収、北京出版社）

(2) 「蒲松齡和兒童文学」（同右所収）

(3) 『聊齋志異研究』江蘇文艺出版社

(4) 「論『聊齋志異』札記」（『蒲松齡研究集刊』第二輯、齊魯書社）

(5) 「『聊齋志異』刻劃人物性格的幾点特色」（『文史哲』第六期、通卷百四十一期、山東大学）

(6) 『評注聊齋志異選』人民文学出版社

(7) 「聊齋志異「黄英」の研究——太宰治「清貧譚」との比較による作意の考察——」（『集刊東洋学』第二十五卷、東北大）

(8) 「『聊齋志異』の文学」（大阪市大中文研究室編『中国の八大小説』所収、平凡社）

(9) 『中国の幽霊』東京大学出版会

(10) 『志異』で他に菊のことを記すのは「田七郎」（巻四）と「宦娘」（巻七）。しかしいずれも作中の一場面で、小道具

飲み過ぎてとうとう彼は菊の本性（等身大の巨大な菊）を暴露するが、姉の処置で元に戻る。花祭りの日、弟はまた子才の友人曾某と飲み、酔っぱらって菊と化し、子才の不注意のため枯死してしまふ。駆けつけた黄英が、鉢に移植し手当てを施すと、やがて秋に花をつけ酒香を漂わせたので、「酔陶」と名づけた。黄英の方は、老後まで変わりなかった。會馬以事客金陵、適逢菊秋、……黄英終老、亦無他異。五百二十六字。

現在までの所、この作品に本格的な考察を試みた論文は、管見の及ぶ限り、後述の大野正博氏のもの以外見当らず、多くは表面的な言及に留ま<sup>とど</sup>まっている。

例えば、古くは魯迅が『中国小説史略』で原文を節録し、簡単に紹介しているのが目を引く。解放後は、徐士年（一九五七年）<sup>(1)</sup>が、弟の陶生が菊の高潔さを体現した人物であることを指摘し、仕官よりも菊を売って生活する人生を重んじていることは、作者の小商人に対する肯定的な態度を反映している、と解釈した。李長之（一九五七年）<sup>(2)</sup>は、「香玉」「葛巾」など『志異』所収の花妖の婚姻譚と共に、この作品の童話的要素を指摘した。

楊柳（一九五八年）<sup>(3)</sup>は、他と一括しこの作品も、封建社会に抵抗して自由な恋愛を貫いた物語であると見た。近年の趙儷生（一九八一年）<sup>(4)</sup>も、菊を売る姉弟の形象に、明末清初の商業資本の発展を看

取した。

これらに比べ、幾らか内容に立ち入ったものとしては、李厚基（一九八〇年）の論文と、<sup>(5)</sup>中山大学中文系《聊齋志異》選評小組（一九七七年）の評説<sup>(6)</sup>がある。

前者は、子才の人物像に注目し、清貧に甘んじながら<sup>かたく</sup>頑なに菊を愛する男の心情が、詳細に描かれていると評価した。後者は、菊が古来から高潔の象徴であり、それに対する作者の見解が、子才と姉弟の対比的な生き方の中で描かれているとした。そして前者と違い、封建文人の称揚した高潔が現実から遊離したもので、菊を売って生活した姉弟の方こそ本当の意味での高潔に価する、と説いた。これは徐士年の意見に近い。

振り返れば我が国でも、この作品は何人かの小説家の関心を惹き、太宰治の翻案「清貧譚」（一九四一年）をはじめ、安岡章太郎『私説聊齋志異』（一九七三年）、森敦『私家版聊齋志異』（一九七九年）などが取りあげて来た。

先に述べたように、「黄英」に関する唯一の専論は、大野氏による、「黄英」と太宰治「清貧譚」との比較研究（一九七一年）である。<sup>(7)</sup>ただこの論文は、あくまで比較に重点を置き、且つ論証の手續きに問題を含んでいるため、参考とするまでに至らなかつた。あるいはまた、次のような短評もある。

# 『聊齋志異』と菊

岡本 不二明

一 はじめに

『聊齋志異』は、周知のように清初の人、蒲松齡（字は留仙<sup>あざな</sup>）により書かれた志怪小説集である。

全部で五百篇近くを数えるその作品の中から、ここでは、菊の姉弟の物語「黄英」——以下作品名には「」をつける——を取りあげるとして、この物語が異類婚姻譚として『聊齋志異』の中で占める位置を、他の作品と比較しつつ検討し、その上で、作品の背後の作者蒲松齡へと論を及ぼしてゆきたいと思う。

まず「黄英」（卷十一）の荒筋を、適宜段落に区切って紹介する。テキストには、張友鶴輯校『會校會注會評本、聊齋志異』（一九六二年、中華書局）を使用し、以下『志異』と略称する。また段落ごとに原文の字数を明示する。

(I)北京の人、馬子才は、大変な菊好きで、ある時に南京へ菊を求めに行った帰途、陶姓を名のる姉弟に出会う。菊作りの談議で

すっかり意気投合した彼は、二人を自分の家に連れ帰る。馬子才、順天人、……馬代諾之、遂與俱歸。二百十八字。

(II)屋敷の南の建物に住んだ姉弟は、豊かでない子才の生活を見て、菊を売ることを提案する。子才は反対したが、弟の陶は構わず町の人々に菊を売り大儲けした。南の建物はその金で立派に改築される。やがて弟は、菊の仕入れに姉を残したまま南方へ出かけ、失踪する。

第南有荒圃、僅小室三四椽、……載花去、春盡不歸。五百七十二字。

(III)時に妻を亡くした子才は、姉の黄英に心を動かすが、彼女は返事を避ける。ちょうどその時、失踪中の弟から、姉との結婚を勧める手紙が届き、始めて二人は結婚に踏み切る。子才は清貧な生活にプライドを持ち、黄英は貧乏を嫌い、論争の末に二人は別居する。だが子才が我慢できずに折れたため、結局元の鞘<sup>さや</sup>に収まる。

而馬妻病卒、意屬黄英、……無以對、遂復合居如初。五百十七字。

(IV)たまたま子才が南京を訪れると、花屋の主人に収まっていた弟を発見したので、強引に連れ帰った。それからというもの、弟は門を閉ざして子才を相手に酒と囲碁の毎日を過ごす。ある日